

◆ギャラリートーク「ツブノ質量」

お話：梅田恭子、聞き手：大倉宏（砂丘館館長）

3月5日（土）午後2時（

参加費：500円（予約不要、直接会場へ）

◆堀川久子 独舞（梅田恭子展会場にて）

3月6日（日）午後4時（

料金：1000円／定員：30名

要予約（電話、ファックス、Eメールで砂丘館へ）

受付開始：2月14日



ねじれ



収集

同時期開催 北書店画廊 梅田恭子展『ツブノヒトツ』

2016年2月29日（月）～3月19日（土）

平日午前10時～午後8時／土曜正午～午後8時

日曜日休

会場：北書店

新潟市中央区医学町通2番町10-1
ダイア・パレス医学町10-1
・新潟駅万代口より「市役所」経由のバス乗車

電話＆ファックス：025（201）74466

主催：新潟絵屋・北書店

2016年2月16日（火）～3月21日（月祝）

午前9時～午後9時／観覧無料

休館日：月曜日（3月21日は開館）

会場：砂丘館 ギャラリー（蔵）+一階全室

*二階和室会場は市民利用等でご覧いただけない場合があります。

主催：砂丘館

新潟市中央区西大畠町5218-1

・新潟駅万代口より浜浦町線C2系統

・または観光循環バス乗車、
バス停「西大畠坂上」下車徒歩1分

・新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は、
駆車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。

電話＆ファックス：025（222）2676

Sakyukan@l203.palala.or.jp http://www.sakyukan.jp/
指定管理者／新潟絵屋・新潟ビルヂング特定共同企業体

梅田恭子展

ツブノヒトツ

2016年
2月16日（火）
3月21日（月祝）
午前9時～午後9時

砂丘館
田日本銀行新潟支店内

フカク
波シテ

シズシナデイル

音ニハ

セトツフリツ

拾ウテ

械イテキレイニ シテ、

必然ノ場所ヘ

カエシタイ



打ち上げ





散下

私たち砂丘館の自主事業を応援しています。

砂丘あられ株式会社

NSGグループ

株式会社ナレッジライフ

新潟ビルサービス

郷土の文化に親しむ会

藤田金属

丸屋本店

梅田恭子（うめだきょうこ）

東京都に生まれる。

1996年多摩美術大学大学院デザイン研究科修了。

主に銅版画や鉛筆、油絵の具などを用いて絵を描いている。

個展を中心に関東、新潟、東京、名古屋、大阪、神戸、山口などで作品展を開催。

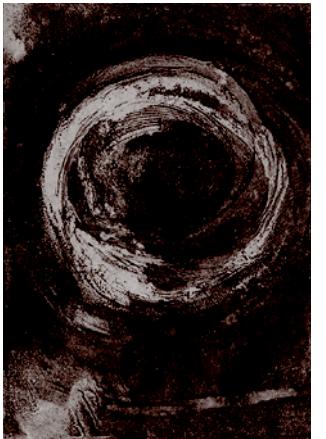
私は、「ツブノヒトツヒトツ」は何なのか、実をいえば、いまだにわからない。
そして「わからなさ」ゆえに、
私の中に投下された小さなツブは、いまだに、

心の片隅に、小さな重みとなつてとどまっている。
ツブの意味を探つて途方に暮れ、意味がわかつたつもりになり、
そういう、自分なりの小さな葛藤はこれからも続くのだろうけれど、
でもそれこそがツブの作用であるのかもしれない、と言い訳がましく思つてみたりもする。
しかし、この小さな丸いツブは、何かはわからないけれども、
社会の不条理にぶつかり、世相の泥にまみれるとき、
このツブがとてもなく清らかで、大切な何か、あることを感じさせる。

目には見えないかもしれないし、かすかかもしれないけれども、
小さなツブの活動はこれからも続く。確実に。

ツブノヒトツヒトツに

岡部万穂(編集者・ライター)



「ツブノヒトツヒトツ」は季刊『版画藝術』122号
(阿部出版、2003年発行)の付録として添付された
梅田恭子の銅版画です。
鉛筆書きの詩片30点一式を、
全部で105種制作された銅版画と
砂丘館でお預かりすることになりました。

全点を蔵のギャラリーで一挙に展観するほか、
新作のドローイングも展示します。

リレー
全点を蔵のギャラリーで一挙に展観するほか、
新作のドローイングも展示します。

ツブノヒトツヒトツが、新しい棲み処を得た、と聞いた。

日本海を見晴らせる、海沿いの街。真冬に雷が鳴り、雷が鳴ると、まもなく雪が降るという。
音もなく降り積もる雪、その現象もまたツブノヒトツヒトツである、とぼんやり考え、
当時に比べると、自分の中でのツブノヒトツヒトツに対するイメージも解釈も、
少しずつ変化していることを感じる。

2003年に、季刊『版画藝術』に添付され、全国に散つていったツブノヒトツヒトツは、
2009年には、銅版画集『ツブノヒトツヒトツ』として、1冊の本にもまとめられた。
そして今回、その元となつた135葉の詩と版画は、新しい拠点を得て、
また新しい活動を始めることになる。

こんなふうに作品の命がつながつていくことは、幸運なことだといえるけれども、
ツブノヒトツヒトツという作品が、そういう運命をあらかじめ持つていたことの
証のようにも思える。

2003年から13年という時に、いろいろなことがあった。
ツブの一つを受け取つた人たちももちろん、13年の間にさまざまなものがあつただろう。
13年も前に、数千の人々のもとに投下されたツブノヒトツヒトツは、どうなつただろう。
時代も人も、めまぐるしく変わり、そして、それはこれからもずっと続く。
でも、ツブノヒトツヒトツ、はちゃんとあつた。

今回の展示に際して、そのことを、しみじみと感じている。